



2014年3月21日(金・祝) 人間J.H家の墓参りを終えて、夕方からアントネッロ主催モンテヴェルディ三大オペラ最終回「歌劇《ウリッセの帰還》(Il ritorno d'Ulisse in patria)」を観に、京浜東北線「川口」駅前にあるリア音楽ホールへ行ってまいりました。でもきょうは疲れたのでレポートはJ.Hさんに委ねます。ちょうど「人間の存在」について描いた作品ですしね。(2014.3.21記)

■ **何だか元気がなく** ホワッとした音楽で始まった今日のオペラ。しかしその第一場が終わったところで音楽に元気が出た。イイゾ、イイゾとちょっとワクワク。でも今回は曲想自体が前2作とは違ってシリアスだったので、激しさや楽しさのインパクトが少なく、殆どが中間色のような感覚だった。指揮も当然静かな部分が多かったので、乗りのいい場面が少なくて残念。今回はその気持ちの埋め合わせとして濱田芳通氏のタクトの先端と流線型に時々注目して、振ってから音が指揮者に届く感覚を何となく眺めた。指揮棒のシャフトやグリップでも表現する音楽に違いが出てくる。濱田氏の指揮は柔らかくて楽しい。

また今回の演奏で、ある瞬間眼(耳)を惹いたのが、ヴィオリーノの杉田せつ子さん、キターラのときの高本一郎さん、チェンバロのときの西山まりえさん。(歌い手ばかりでなく、楽器も一人二役)

■ **このシリーズの衣裳**には毎回驚くが、今回はバルコニーの上に登場したヘドロの塊のような衣裳に目が釘付けになった。あの中からどうやって人間が出てくるのだろうと気になって「人間のはかなさ」の歌は聴こえているのに、その本体が舞台前面に横たわっていたのに気付いたのは、その歌い手が起き上がった時。その瞬間を言葉で表現するなら「ドヨ〜ン」という感覚。「こ、ここはウン千年前の中国か!?!」思わず目の前に霞がかかる山水画が広がった。

それから声の美しいハチマキ締めた魚屋さんジョーヴェと、魚を突くヤスを持つ旅一座役者風漁師ネットウーノ。フィアーチェ人観光用赤穂浪士が、フリマで三体一組で売っている置物風に変身。大黒風の帽子や腰のひょうたんで、何となく七福神なのかなあ〜と不確定ながら思う。それから正直者の羊飼いがボロをまとっていたのは「ボロは着てても心は錦」という老子の談話か。和風より中国風の方が比率が高かったように見えたが、日中国交回復なるか。

■ **ウリッセ役**の春日保人さん(バリトン)の明るく品のある声質は主役タイプ。表現力に安定感がある。エウメーテ役の黒田大介さん(テノール)はズバリ「全身で歌っている」声と感情が天上へ向かって広がっていくのが感覚の中に見える。身体丸ごと歌の人。多大な拍手も領ける。ミネルヴァ役の澤村翔子さん(メゾソプラノ)はいつも心地よく聴ける。テレマコ役の中嶋克彦さん(テノール)も好演した。ペネーロペ役の上島緑さん(メゾソプラノ)は、歌に低めの音が多かったので、本来奇麗に出る声域があまり聴けなかったのが惜しいところ。しかし、何と言っても今回の注目はイーロ役の渡邊公威さん。食べる演技がバツグン!な... なんておいしそうに食べるんだ〜! しかも大きいものと小さいものを噛むとき、頬張った状態と噛み砕いた状態の使い分けが絶妙。いや〜、思わず見とれました。

■ **組み込まれたパロディ**は、タイタニックの船首で両手を広げるシーン、曲目「タブー」、「私を死なせて」だが、一番の見どころはイーロとウリッセの戦いを相撲シーンにしたところ。これは面白かった。それから王妃に求婚するアンティノオが「(王妃の態度が) つれない」と「(魚が) 釣れない」をかけたダジャレも笑えた。それにしても相変わらず一人二役当たり前のこのシリーズ。お疲れ様です。

■ **内容**で一番メインだった場面は、ジュノーネがジョーヴェに人間を許すように進言するところ。しかし、この神々の夫婦間のやり取りも、人間夫婦の男女関係同様になっていたのは地上的。

■ **笑いの中のシリアス**は、イーロが保護者を失って、食べていけない悲しみで命を絶つところ。長年仕えた宮廷を突然解雇されたモンテヴェルディ。その苦労が繰り返されないような社会的仕組みを作ることに腐心した彼の人生が重なる。食べることは生きること。生きるとは食べること。「自分がたくさん食べることを保護者たちは喜んでくれた」というイーロの歌は、モンテヴェルディを評価してくれた世間そのものだろう。

それにしても、17:00~20:30 という公演。遠くからやってくる人への配慮の時間帯かもしれないが、朝から動いている者には食事時間がままならず。めばしい店は近辺に見当たらず。イーロの如く空腹にさいなまれながら、帰還後の21:30 によりやくサンドウィッチにありついて生き返った。